

中央ヨーロッパ東部地域住民の観光パターンの変化に関する一考察

呉 羽 正 昭*

1. はじめに

旧東ドイツ、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリーが存在する中央ヨーロッパ¹⁾東部は、かつて共産主義体制のもとにあり、旧西ドイツやオーストリアといったその西側諸国との交流は多くの面で制限されていた。観光旅行に伴う移動にも何らかの点で制限が設けられていた。それは大きく、出入国ビザの取得が困難あるいは煩雑といった政治的な理由や、通貨交換や外貨獲得が困難などの経済的理由に基づいていた(Hall, 1991)。

しかし、1980年代の後半に生じたいわゆる「東欧改革」とともに生じた国境解放により上記の制限はほとんどなくなり、観光に関する基盤は大きく変化したと考えられる。これは次の2点にまとめることができるであろう。第1には、中央ヨーロッパ東部地域にかつての西側諸国から多くの観光客が訪れるようになったことであり、第2には中央ヨーロッパ東部の住民の観光旅行パターンが変化したことである。本研究は上記のうち第2の点について扱う。

この点に関してさらに2つの分析視点があげられる。それは中欧東部諸国の住民を対象として彼らの旅行先や旅行パターンの変化をみる方法と、ある旅行目的国での中欧東部地域からの観光客数やその行動の変化を分析する方法である。最初の分析については、資料が不足しているという問題点がある。ゆえに本稿では、確実な資料が存在する後者についての分析を中心に行うこととした。さらに前者の分析視点も若干加えることによって、中欧東部住民の観光パターンの変化を考察する。

本研究の目的は、中央ヨーロッパ東部地域の住民の旅行目的地としてオーストリアをとりあげ、そこでの観光客数の変化を分析し、その結果について当該地域からオーストリアへの観光旅行の地位や日帰り観光の

出現といった点から考察することによって、中欧東部諸国の住民による旅行パターンの変化の特徴を明らかにすることである。

目的にあげた観光客数の変化については、宿泊客数の年次推移およびその月別推移から分析を行う。オーストリアのなかでの目的地の差異、滞在期間、滞在施設については、紙幅の関係上別稿で論ずることとする。本研究でいう中央ヨーロッパ東部地域は、ポーランド、チェコ、スロバキアおよびハンガリーの4カ国をさす。

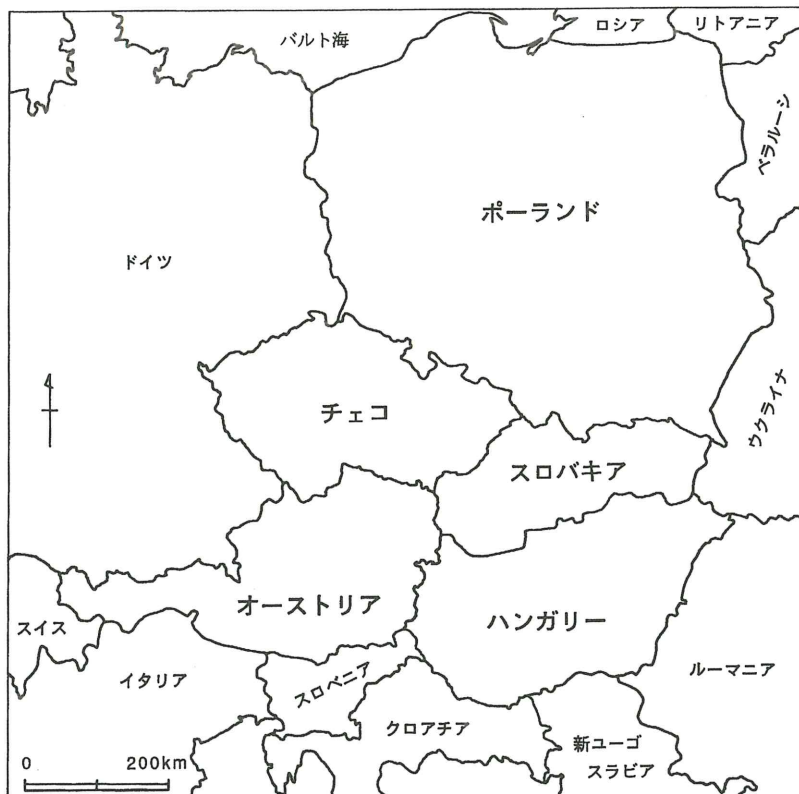
彼らの旅行目的地の分析対象としてオーストリアをとりあげたのは、まず同国も中央ヨーロッパに位置し、中欧東部諸国とともにオーストリア＝ハンガリー帝国の領土であったことによる。さらに観光関係の統計資料の整備が進んでおり、本研究の課題である観光行動の変化に関し、過去にさかのぼって同一指標の資料が多く得られるためである。資料には、オーストリア統計局で毎年編集されている『Der Fremdenverkehr in Österreich (オーストリアにおける観光)』²⁾を用いた。また第1図に中欧諸国およびオーストリアの位置を示しておく。

2. オーストリアにおける中欧東部地域からの観光客数の変化プロセス

(1) 第二次世界大戦前

最初に、第二次世界大戦前の状況について記述しておく。第1表は1936年度におけるオーストリアの延べ宿泊客数を、出発国別に表したものである。当時、全宿泊客数のうちオーストリア人の割合は3分の2に達していた。外国人観光客の中では、ドイツ人が最も多く、それにチェコスロバキアとハンガリーが続いていた。ポーランドは33万程度とやや少なかった。中欧東部3国をあわせると延べ宿泊客数は約240万人、また全外国人宿泊客に占める割合も35%であった。しかしその際、統計の得られた1936年度という年代を考慮しなければならない。それは、1000マルク封鎖³⁾の影響下にあったことである。これによりドイツ第三帝国からの

*愛媛大学法文学部



第1図 研究対象地域：中央ヨーロッパ

第1表 オーストリアにおける主要出発国別の延べ宿泊客数（1936年度^{a)}）

順位	出発国 ^{b)}	延べ宿泊客数(千人)	国別割合(%)	全外国人宿泊客に占める割合(%)
1	オーストリア	13,763.9	66.7	*
2	ドイツ	1,652.1	8.0	24.2
3	チェコスロバキア	1,322.7	6.4	19.4
4	ハンガリー	716.1	3.5	10.5
5	イギリス	578.2	2.8	8.5
6	ベルギー・オランダ	360.5	1.8	5.3
7	ポーランド	330.5	1.6	4.8
8	合衆国・カナダ	279.6	1.4	4.1
9	フランス	261.2	1.3	3.8
10	イタリア	252.2	1.2	3.7
11	ユーゴスラビア	246.5	1.2	3.6
12	スイス	201.1	1.0	2.9
	その他	630.7	3.1	9.2
	合計	20,595.3	100.0	100.0

a) 1936年11月から1937年10月まで。

b) 延べ宿泊客数20万人以上の国のみとりあげた。

資料:オーストリア統計局:Fremdenverkehr in Österreich im Jahre 1981.

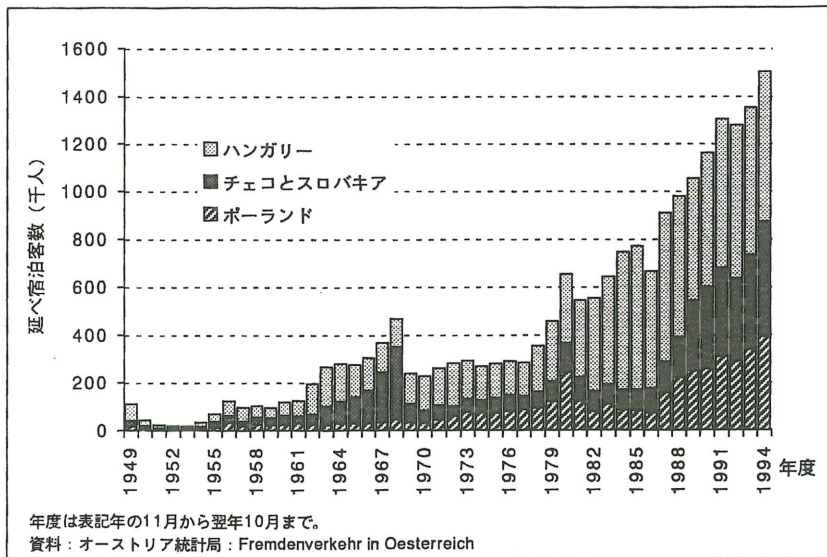
宿泊客がかなり減少し、当時、オーストリア東部においてはチェコスロバキアからの観光客が多くを占めて

おり、この傾向はオーストリア併合（1938年）まで続いた（Jordan, 1990, S. 153-154）。しかし、これを差し引いたとしても、オーストリアにとって中欧東部は、ドイツに次いでかなり重要な観光市場であった。

チェコスロバキア、ハンガリーは第一次世界大戦前まではオーストリア＝ハンガリー帝国の領土であり、またポーランド南部もそれに属していた。大戦の後それぞれの国は独立したものの、人々の交流は続いていたものと考えられる。さらに今日のチェコは、当時、ヨーロッパ内でも有数の工業地域であり、その主要都市プラハは、帝国内でウィーンに次いで第2位の観光市場であった（Jordan, 1990, S.147）。こうしたプラハの都市住民を中心に多くの観光客がオーストリアを訪れた。

(2) 第二次世界大戦後から1980年頃まで

第二次世界大戦後、中央ヨーロッパには新たな政治秩序が誕生し、観光旅行に関する環境は大きく変化した。第2図は、オーストリアにおける中欧東部諸国からの延べ宿泊客数の推移を示したものである。また第2表にはそれらの数値を5年おきに示した。第二次世



第2図 オーストリアにおける中欧東部諸国からの宿泊客数の推移(1949～1994年度)

第2表 オーストリアにおける中欧東部諸国からの宿泊客数の推移とその地位(1949～1994年度)

年度 ^{a)}	延べ宿泊客数 (千人)					オーストリアの全宿泊客数に占める割合 (%)
	ポーランド	チェコとスロバキア	ハンガリー	小計	オーストリアの合計	
1949	15.6	28.2	67.4	111.2	17,164	0.65
1954	3.9	14.8	15.2	33.9	26,050	0.13
1959	20.2	32.9	40.5	93.6	41,842	0.22
1964	28.1	95.8	154.9	278.8	61,992	0.45
1969	32.2	79.5	125.2	237.2	79,054	0.30
1974	72.8	54.4	140.6	267.8	93,497	0.29
1979	120.2	84.1	250.7	455.0	101,377	0.45
1984	83.8	85.4	577.4	746.7	113,010	0.66
1989	245.3	297.1	510.0	1,052.4	122,750	0.86
1994	389.0	484.0	628.6	1,501.6	116,981	1.28

a) 年度は表記年の11月から翌年の10月まで。

資料:オーストリア統計局:Fremdenverkehr in Österreich

界大戦後最も早くデータが存在するのは1949年度であるが、当時でも延べ宿泊客数は約11万人にとどまり、戦前期の20分の1以下となった。また当該地域のオーストリア内での観光市場としての地位も著しく後退した。

その後1980年頃までは、ポーランド、チェコスロバキアおよびハンガリーをあわせても延べ宿泊客数は30万程度にしか達しなかった。またオーストリアにおける当該地域からの宿泊客数の割合も、ほぼ0.5%以下

で推移していた。例外的な変化としては、1960年代後半のチェコスロバキア、さらには1980年前後のポーランドからの宿泊客の急増と急減である。これらは両国での政治的な変化に対応している。チェコスロバキアの場合は「プラハの春」と呼ばれる政治改革であり、ポーランドの場合には「連帯」による活動があげられる。前者の場合には旧ソ連の軍事介入、後者の場合には政府による「連帯」の非合法化などにより政治体制は再び「正常化」し、両国からの観光客数は急激にも

第3表 東欧における共産圏ブロック内の外国人観光客の割合（1960～1988年）

目的国 ^{a)}	目的国における東欧諸国 ^{b)} からの観光客の割合（％）			
	1960年	1970年	1980年	1988年
旧チェコスロバキア	nd ^{c)}	75.0	77.3	89.6
ハンガリー	51.2	81.4	82.9	65.2
ポーランド	37.1	69.2	77.4	54.7
ブルガリア	51.1	51.7	38.4	43.1
ルーマニア	69.1	76.2	77.6	79.4
旧ユーゴスラビア	5.5	6.6	10.2	7.3

a) アルバニア、旧東ドイツ、旧ソ連についてはデータなし。

b) 旧ソ連は含まない。

c) データなし。

資料:Hall (1991, p.92)

との水準に戻っている。

中欧東部住民の当時の旅行先に注目すると、社会主義体制下の当時は、ヨーロッパ東部の共産主義ブロック間の観光流動がかなりの割合を占めていた。第3表は、共産圏諸国間の観光流動について到着国における旧東欧諸国からの観光客の割合を示したものである。これは到着地ベースの集計であるため、ある国の住民がどの国に旅行するののかについて正確には把握できない。しかし、旧ユーゴスラビアを除いた国々において東ヨーロッパ内からの観光客の比率は40～90％程度である。ゆえに、かなりの高い割合で共産圏ブロック間の旅行がなされていたものと考えられる。その傾向は、1972年に行われた旧東ドイツ、チェコスロバキアおよびポーランドのそれぞれの間のパスポート・ビザの制限の廃止とともに強まっていき (Mellor, 1991, p.150), またハンガリーを除いて1980年代半ばまで続いた。

(3) 1980年頃以降

中欧東部諸国からオーストリアへの観光客数の推移にみられる最も大きな特徴は、1980年代初め頃からの宿泊客数の急増である (第2図)。しかし当初、増加がみられたのはハンガリーのみであり、他の国では1988年頃からのいわゆる「東欧改革」の進行とともにその増加が顕著になった。1980年代末には、延べ宿泊客数は100万人程度であったが、1994年度には150万を超えた。しかしこの数字も第二次世界大戦前におけるそれと比べても、その半数程度にとどまっている。

ハンガリーは、1970年代の終わり頃から、西側諸国との移動の自由化を推進してきた。例えば、オーストリアおよびフィンランドとの間のビザを1979年1月に

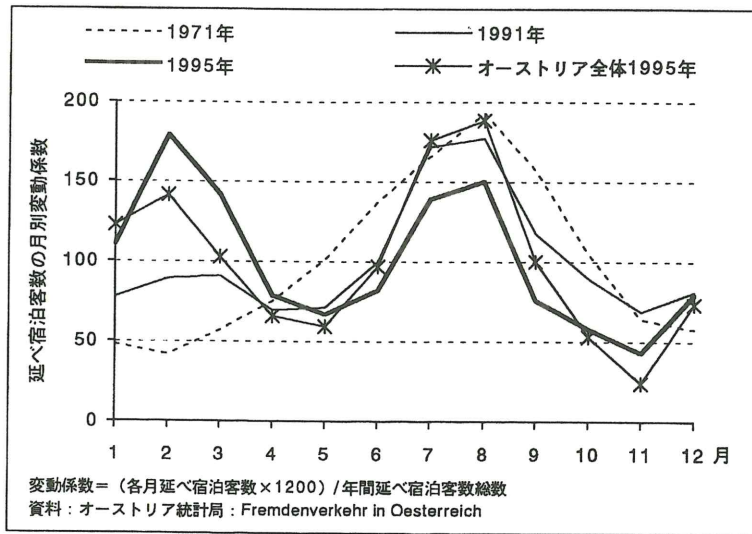
廃止している。こうした政策の結果、一方では、西側諸国からハンガリーへの観光客が1980年代に急増した (Jordan und Miczek, 1989)。また逆に、ハンガリー人による西側への旅行制限も緩和されていった。ハンガリー人は外貨があれば3年に1度西側諸国への旅行が可能であったが、それは1982年には毎年1回へと変更された (中村, 1987, p.111)。ハンガリー人によるオーストリアへの延べ宿泊客数は1980年代半ばに既に、約60万人に達し、その後はほぼ同数で推移している。

一方、ポーランド、チェコおよびスロバキアからの延べ宿泊客数は、1980年代の中頃には合計してもわずか20万人であった。しかし1988年頃からの自由化の動きのなかで、国境解放など観光旅行に伴う移動の制限も緩和されてきた。たとえば旧チェコスロバキアにおいては、1990年にヨーロッパのほとんどの国とのビザが廃止され、同時に外貨に関する諸制限も緩められた (Mariot, 1993, S.39)。こうした動向とともに宿泊客数も急激な増加を示し、1994年度にはこの3国においてその値は延べ90万人程度に達している。

オーストリアの全宿泊客数に占める中欧東部地域からの客数の割合についてみると、上述したような当該地域からの宿泊客数の増加傾向およびオーストリアにおける全宿泊客数の停滞傾向とともに、その値は急増している (第2表)。しかし、1994年度においてもその値は約1.3%にとどまっている。すなわち、オーストリア全体のなかで当該地域からの観光客の重要性は、宿泊客数を分析した限りでは依然として著しく低い。

3. オーストリアにおける中欧東部地域からの観光客の月別変動とその変化

観光客の月別変動を分析するため、ここでは月別の



第3図 オーストリアにおける中欧東部諸国からの宿泊客数の月別変動(1971~1995年)

延べ宿泊客数の変動をみた。この月別変動も、先述した観光客数の増加傾向とともに変化している。

第3図は、1971、1991および1995年における延べ宿泊客数の月別変動を示したものである。この変動係数は、月平均宿泊客数との比率を表している。1971年では、夏季、すなわち6月から9月に著しく集中している傾向が読みとれる。この傾向は中欧東部諸国が社会主義体制下にあった期間を通じた特徴である。国ごとの差異もほとんど認められない。しかし1991年になると、夏季の変動係数の数値はほとんど変わらず、冬季のそれがやや上昇してきた。さらに1995年では、冬季のピークがはっきりと出現し、夏季のそれを上回るほどに増加した。その結果、冬季と夏季の2季にピークが存在する形態へと変化した。このように中欧東部住民の旅行時期は大きく変化してきている。

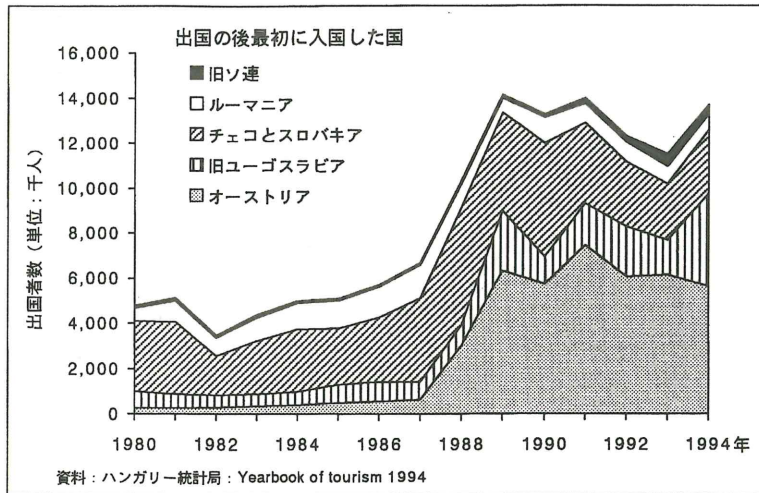
第3図にはオーストリア全体の延べ宿泊客数の月別変動も示した。オーストリア全体の傾向も夏季と冬季の2季型であるが、夏季の宿泊客の方がやや多い。それに対して、中欧東部諸国では冬季が優位である。国別にみると、ポーランドにおいてとくにこの傾向が著しく、2月の延べ宿泊客数は、月平均の値の3倍近くに達する。またチェコもそれに類似する。一方ハンガリーおよびスロバキアでは夏季のピークが卓越する。

この資料のみでははっきりとした考察を行うことは困難であるが、ポーランドおよびチェコにおいては、他の2国に比べスキーを中心とした冬季スポーツが盛んに行われている。たとえば国際的なスキー競技会への

参加状況やその結果をみてもそれは明らかである。この理由によって、それらの2国からオーストリアのスキー観光地域に滞在する例が増加しているものと推察される。また、本稿では詳細な分析は行わないが、彼らのオーストリア国内での目的地も大きく変化している。すなわち、多くのスキーリゾートが存在するアルプス空間をかかえるザルツブルク州やチロル州の割合が1990年代に入って急激に増加している。もちろん、ポーランドやチェコ国内にもエルツ山脈、スデーテン山脈およびカルパチア山脈にスキーリゾートは存在するものの、その規模は小さい。それに比べオーストリアアルプスにはかなり大規模なものが存在し、国境解放以後、アルプス地域への観光旅行に対する需要が高まっているものと考えられる。

4. 中欧東部諸国におけるオーストリアへの観光旅行の位置づけと日帰り観光の出現

ここまでオーストリアにおける中欧東部諸国からの観光客の増加について分析を行ってきたが、本章では、それぞれの国における観光市場の規模やオーストリアへの旅行者数の規模についてみていく。ただしここでは、統計の得られたハンガリーおよび既存の研究において資料が存在するチェコスロバキアのみについて触れる。なお両国の資料の性格も異なっていることも断っておく。



第4図 ハンガリーにおける出出国数の推移 (1980~1994年)

(1) ハンガリー

ハンガリーについては、同国の統計局が発行している観光に関する統計書のなかの出出国数の資料を用いた (Központi statisztikai hivatal, 1995)。第4図は出出国数を最初に入国した国別に示したものである。それゆえ、旅行目的の国とは異なっている場合もある。

このグラフによると、1987年までは、出国先のほとんどはチェコスロバキアであった。1979年に既にオーストリアとの間で査証が廃止されたとはいえ、1988年になるまでは、オーストリアへの出国者は約30万人から60万人とかなり少なかった。しかし1988年以降オーストリアへの出国者が著しく増加し、全出国者の半数

程度を占めるようになった。1991年にはその数は約750万人に達した。しかし、その後はやや減少傾向にある。オーストリアへの出出国数の増加とともに、ハンガリーからの出出国数総数も増加しており、市場経済化の進展とともにハンガリーの観光旅行市場も増大しているものと考えられる。

(2) 旧チェコスロバキア

第4表は、Mariot (1993, S.39) の資料を用い、旧チェコスロバキア人の外国旅行者数の変化を目的国別に示したものである。データは1989年までのみであるが、他に資料が存在しないためこの資料を利用する。

第4表 チェコスロバキア人による外国への旅行者数の変化 (1986~1989年)

目的国		目的国への旅行者数 (千人)				旅行者数の国別割合 (%)			
		1986年	1987年	1988年	1989年	1986年	1987年	1988年	1989年
旧共産圏諸国	ハンガリー	2,340	2,708	1,906	2,079	34.6	36.1	26.3	24.3
	旧東ドイツ	2,137	2,290	2,521	1,950	31.6	30.5	34.7	22.8
	ポーランド	364	559	884	1,025	5.4	7.4	12.2	12.0
	旧ユーゴスラビア	619	524	362	375	9.1	7.0	5.0	4.4
	旧ソ連	357	406	414	355	5.3	5.4	5.7	4.1
	ブルガリア	335	365	334	321	4.9	4.9	4.6	3.7
	ルーマニア	110	124	131	124	1.6	1.7	1.8	1.4
旧西側諸国	オーストリア	97	108	136	1,562	1.4	1.4	1.9	18.2
	旧西ドイツ	169	174	248	417	2.5	2.3	3.4	4.9
	イタリア	33	34	46	68	0.5	0.5	0.6	0.8
	フランス	22	30	35	41	0.3	0.4	0.5	0.5
	その他	187	183	241	252	2.8	2.4	3.3	2.9
合計		6,770	7,505	7,258	8,569	100.0	100.0	100.0	100.0

資料: Mariot (1993)。原データは不明。

1988年までは、旧社会主義国を目的地とするものが90%を超えていた。とくにハンガリー、旧東ドイツおよびポーランドといったチェコスロバキアの隣接諸国で大半を占めていた。しかし、1989年になると政治体制の変化に対応し、旅行先も変化している。とくにオーストリアへの旅行者が著しく増加し、その数値はそれ以前の10倍以上になっている。しかし、旅行者全体に占める割合は、1989年の時点では依然として20%弱にとどまっていた。オーストリアと同様に、ドイツにもかなりの増加傾向が認められる。一方旧共産圏諸国への旅行者の割合は低下し、1989年には73%になった。

ここにあげたデータはやや古いものの、1990年代には、2章で述べたオーストリアにおけるチェコおよびスロバキアからの宿泊客数の増加でみられたように、旧西側諸国への旅行者はますます増加していると思われる。

(3) 日帰り観光パターンの存在

2章の最後で「宿泊客数を分析した限りでは」と記述したのは、実際には非常に多くの日帰り観光客の存在が認められるためである。たとえば、ハンガリーからオーストリアへの宿泊客数は、1990年代に入ってから年間延べ60万人程度(第2図)、さらに実数では約20万人が存在する。しかし、第4図で示した出国者数のデータによると年間約600万人(延べ数)ものハンガリー人がオーストリアに入国している。また、第4表によればチェコ人およびスロバキア人のオーストリアへの旅行者数は1989年には156万であった。しかしオーストリア統計局の資料によれば、同年の宿泊客数は、延べ数でもその値はわずかに30万である。

すなわち、非常に多くの日帰り観光客の存在が指摘されなければならない。しかしこれについては、オーストリアでは日帰り観光に関する統計が存在しないため、日帰り観光流動の規模の把握は困難である。さらにSmeral(1993; 1994)によれば、宿泊客のなかでも登録外宿泊施設¹⁾に滞在するものや、自家用車の車中や知人宅で宿泊するものも無視できないほどの数であるという。

浮田(1983, pp.529-533)は、国境をはさむ両側の地域相互間の結びつきに関して、国境越え通勤者、買い物などのための往来、国境を越えた観光・レクリエーションなどの点からみた多くの研究例を挙げている。それらの研究は、ドイツ語圏の1980年頃までのもの限

られるが、買い物行動に限って言えば、西側諸国間でそうした往来が非常に多いことが指摘されている。その理由として商品の価格、質、品揃えなどの市場の差異があげられている。これと同様の往来が、1980年代後半からの本格的な国境解放以後、中欧東部地域とオーストリアやドイツとの間で多くなされるようになったのであろう。中欧東部諸国において、いわゆる「東欧改革」以後に市場経済化が進展しつつあるが、上述した商品市場の差異は依然として存在し、それらが多くの買い物観光、とくに日帰りの買い物観光を推し進めているといえよう。この結果、国境をはさむ両側の地域において買い物観光がさかんになされる地域が形成されつつある⁵⁾。

Aschauer(1995)は、ハンガリー北西部の住民が自家用車で頻繁にオーストリアに向かうことを示した。彼らの目的は買い物、観光、親戚・知人の訪問などで、購入物品は、多い順に機械・電化製品、熱帯・亜熱帯産の果物(とくにバナナ)、甘味品、コーヒー、洗淨剤・洗剤となっている。また加賀美(1994, p.62)はドイツとチェコとの国境で、土曜日には余暇を目的とした越境が卓越していることを示した。その具体的目的は、買い物、食事、行楽で大半を占めていた。ドイツに向かうチェコ人はきわめて特定の商品(食料品、廉価な衣料品、高価な機器、自動車用品)を購入することを目的とし、その動機は、豊富な品揃え、優れた品質、新しいファッションであるという。Smeral(1993; 1994)によると、こうした買い物観光の多くは日帰りの形態であり、購入物品のほとんどは、個人的に利用されるものである。

5. おわりに

本研究では、中央ヨーロッパ東部地域の住民の旅行目的地としてオーストリアをとりあげ、そこでの観光客数の変化を分析し、さらに当該地域の観光旅行市場や日帰り観光形態の実態を論述することによって、中欧東部諸国の住民による旅行パターンの変化の特徴を明らかにしてきた。その結果は以下のようにまとめられる。

オーストリアへの中欧東部諸国からの観光客は、第二次世界大戦前ではかなり大きな地位を占めていた。しかし戦後の社会主義化によりその地位は著しく低くなった。社会主義体制下では、その経済ブロック間での観光旅行が大半を占めた。1988年頃からのいわゆる

「東欧改革」による国境解放とともに宿泊客数は急激に増加した。ただしハンガリーは他国より早くから西側諸国との移動の自由化を推進したため、1970年代の終わり頃からその宿泊客数の増加がみられた。しかしオーストリア国内における中欧東部地域からの宿泊客数の地位は依然として著しく低い。こうした1980年代後半からの中欧東部地域からの観光客の増加は、オーストリア以外の旧西側諸国の多くの地域でもみられるのであろう。

彼らのオーストリアへの旅行時期では、かつては夏季観光が中心であったが、近年冬季にも多くの宿泊客がみられるようになった。これは、研究対象地域がオーストリアというヨーロッパにおける冬季リゾートの集積地域の1つであるためであろう。こうした事実は、中欧東部住民の観光パターンが多様化しつつあることを示している。

ハンガリーおよびチェコにおける旅行者市場を概観したところ、そこで得られたオーストリアへの出国者数や観光客数と、オーストリアにおける当該地域からの宿泊客数との間に大きな差異がみられた。その際、買い物観光を中心とした日帰り観光客が存在し、それはかなりの規模に達することが指摘された。彼らは、食料品、電化製品など個人的に利用する商品の購入を目的に頻繁に国境を越えている。中欧東部諸国では、近年市場経済化が進展しつつあるが、商品の価格、質、品揃えなどの点からみると旧西側諸国との市場の差異は依然として存在する。その結果オーストリアやドイツと、ポーランド、チェコ、スロバキアおよびハンガリーとの間に、多くの日帰り買い物観光をもたらしているといえよう。また道路整備などの交通条件の改善もこの観光形態の発展に大きく寄与している。

[付記] 本稿は、平成8年度文部省科学研究費補助金(国際学術研究・学術調査)による研究「中央ヨーロッパにおける市場経済化の進展と地域構造の変化 - 旧東ドイツ・ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリーの事例 - (代表者: 小林浩二; 課題番号: 08041053)」の成果の一部である。現地調査に際して貴重な助言をいただいたオーストリア東・南東ヨーロッパ研究所のPeter JORDAN博士をはじめとする多くの方々、さらに統計資料の収集に際し便宜を図っていただいたインスブルック大学地理学教室のMaria HAFNERさんに深く感謝いたします。なお本研究の一部は、1997年日本地理学

会春季学術大会(東京都立大学)で発表した。

注

- 1) 中央ヨーロッパの地域概念については、加賀美(1992)、加藤(1990)および羽場(1994, pp.150-180)などが参考となる。
- 2) 1995年版については、Österreichisches Statistisches Zentralamt(1996)。
- 3) 1000マルク封鎖(1000-Mark-Sperre)は、ドイツ第三帝国が、オーストリアに対して1933年6月から1936年7月まで行った経済制裁の1つである。オーストリアへ旅行しようとするドイツ人に対して1000マルクの支払いを命じた。1931年度には、ドイツからの延べ宿泊客数は約400万人であったが、1933年度には53万人へと急減した(Österreichisches Statistisches Landesamt, 1938)。
- 4) 登録外の宿泊施設での宿泊客数は、オーストリア統計局の統計に算入されない。一般には、その宿泊料金は安価である。
- 5) たとえばハンガリーでは、その北西部に西側諸国からの日帰り客を中心とした買い物観光地域が存在する(Jordan, 1993, S.14)。

文 献

- 浮田典良(1983): 国境地域の人文地理学的研究 - ドイツ語圏における近年の研究動向 - 人文地理, 35, 518-534.
- 加賀美雅弘(1992): 地理的単元としての中央ヨーロッパ(Mitteleuropa)に関する一つの見解. 新地理, 40-1, 13-20.
- 加賀美雅弘(1994): 国境解放による旧ドイツ国境地域の変容 - チェコとの国境地域についての研究事例にみる - 東京学芸大学紀要第3部門社会科学, 45, 55-65.
- 加藤雅彦(1990): 『中欧の復活 - 「ベルリンの壁」のあとに -』, 日本放送出版協会, 212p.
- 中村泰三(1987): 『東欧圏の地誌』, 古今書院, 255p.
- 羽場久泥子(1994): 『統合ヨーロッパの民族問題』, 講談社, 250p.
- Aschauer, W. (1995): *Auswirkungen der wirtschaftlichen und politischen Veränderungen in Osteuropa auf den ungarisch-österreichischen und den ungarisch-rumänischen Grenzraum*. Potsdam, 166S. (=Potsdamer Geographische Forschungen, Bd. 10).
- Hall, D.K. (1991): Evolutionary pattern of tourism development in Eastern Europe and the Soviet Union. Hall, D.K. ed.: *Tourism and economic development in Eastern Europe and the Soviet Union*. Belhaven, London, 79-115.

- Jordan, P. (1990): Die Entwicklung der Fremdenverkehrsströme in Mitteleuropa (1910-1990) als Ausdruck politischer und wirtschaftlicher Veränderungen. *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft*, 132, 144-171.
- Jordan, P. (1993): Einige Orientierungspunkte zur Einführung. Jordan, P. und Tomasi, E. Hrsg.: *Perspektiven des Fremdenverkehrs im östlichen Mitteleuropa*. Arbeitskreis für Regionalforschung, Wien, 9-25.
- Jordan, P und Miczek, G. (1989): *Aufschwung des Fremdenverkehrs aus westlichen Ländern nach Ungarn in den 80er Jahren (Karte und Begleittext im Atlas Ost- und Südosteuropa)*. Österreichisches Ost- und Südosteuropainstitut, Wien.
- Központi statisztikai hivatal (1995): *Idegenforgalmi évkönyv 1994 (Yearbook of tourism 1994)*. Budapest, 176p.
- Mariot, P. (1993): Tschechoslowakei, Teil II. Jordan, P. und Tomasi, E. Hrsg.: *Perspektiven des Fremdenverkehrs im östlichen Mitteleuropa*. Arbeitskreis für Regionalforschung, Wien, 37-47.
- Mellor, R. (1991): Eastern Germany (the former German Democratic Republic). Hall, D.K. ed.: *Tourism and economic development in Eastern Europe and the Soviet Union*. Belhaven, London, 142-153.
- Österreichisches Statistisches Landesamt (1938): *Statistisches Jahrbuch für Österreich 1938*. Wien, 39-48.
- Österreichisches Statistisches Zentralamt (1996): *Der Fremdenverkehr in Österreich im Jahre 1995*. Wien, 237S.
- Smeral, E. (1993): Emerging Eastern European tourism markets. *Tourism Management*, 14, 411-418.
- Smeral, E. (1994): *Tourismus 2005: Entwicklungsaspekte und Szenarien für die Tourismus- und Freizeitwirtschaft*. Ueberreuter, Wien, 340S.